The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	父との思い出 : 言葉と時間の人ラクシュミーダル・マーラヴィーヤ
Author(s)	野崎, ターラー
Citation	印度民俗研究. 2020, 19, p. 3-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

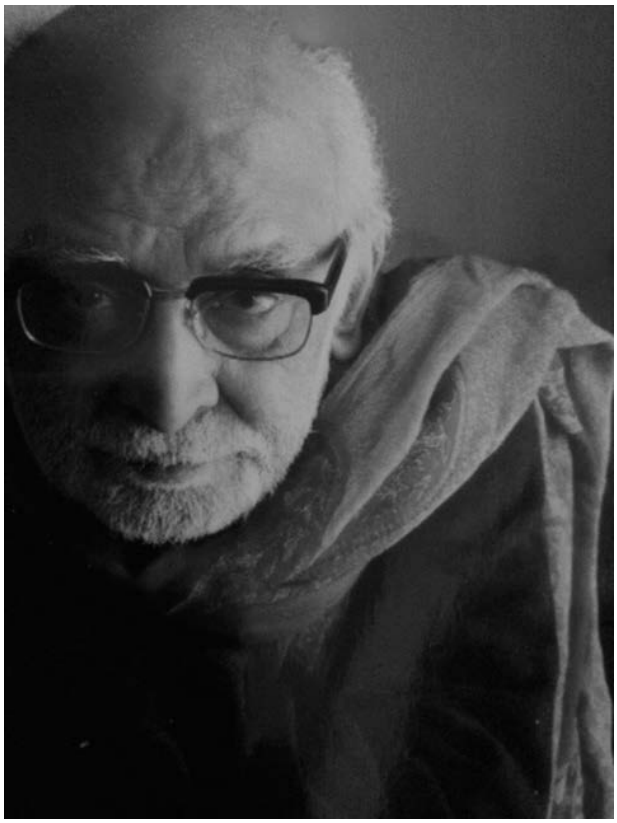
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

父との思い出

—言葉と時間の人ラクシュミーダル・マーラヴィーヤ—

野崎　ターラー



डॉ. लक्ष्मीधर मालवीय

（1934 年 11 月 27 日－2019 年 5 月 10 日）

父ラクシュミーダル・マーラヴィーヤが晩年を過ごした、亀岡の自宅で今これを書いている。

昨年５月に亡くなった父について、文章を書く依頼を頂いたが、正直な気持ちをいうと、父はいなくなってはいない。これは身内を亡くしたほとんどの親族が思う気持ちだろう。ただ、その内容は各人によって異なると思うので、ここに、私と父との場合について書きたいと思う。

父は‘言葉’の人、そして‘時間’の人だった。

ヒンディー語教師として、研究者として、作家として、長年言葉に携わってきた。それは社会的役割であったが、父は家庭でも、真に「言葉」の人だった。

父には、言い淀むということがなかった。家庭内では、外国語である日本語を話していたが、「えーとー」や、「あれあれ、、、」といった言葉を発したことはついぞなかった。つねに、手入れの行き届いた刀やメスといった類の刃物を差し出すように、私たち家族の前に言葉を差し出した。刃物という喩えを使ったが、それは実際、場の空気をピリッとさせる、時には切り裂くことさえあるものである。だから、父が同じ部屋にいると不用意なことは口にできず緊張した。とはいえ、父はいつもしかめ面をしていたわけではない。父特有のユーモアや皮肉を聞くのは家族の楽しみであった。そのときも、とぼけたことや場を和ませるようなことを言うのではなく、よく切れるハサミで切り絵を作り出すが如く、どこかに言葉を扱う緊張感は漂っていた。今思うと、父は言葉を扱う職人だったのだろう。恐れもあり、楽しみもあり、とにかく父の使う言葉は、一級品であった。（余談だが、父はモノマネの達人でもあった。ニュースで出てくる政治家のモノマネなど、とてもうまかった。彫りの深い顔立ちでニコリともせずするものだから、たまらなくオカシかった）

与えられていたのは緊張感だけではない。言葉から得られる喜びや楽しみも十分すぎるほどもらった。子供時代、食卓で私と兄、母が食事を取っていると（父はひとりで食事をすることが多かった。特に夕食は１０時ごろなので、別に取ることが多かった）、突然父が来て、そのとき自分が気

に入っている詩やシュロークを読み上げる。感極まると泣きながら詠むので、その様子がおかしくて、兄と笑いをこらえるのに必死だった。とはいえ、詩の、もっといえば言葉の美味しさはこのような日常から少しずつ与えられ、気がつくと、私も詩や短歌、文章に人一倍の興味を持つようになっていた。１０代も後半になると、日本の詩で気に入ったものを父に伝えることもあり、互いに自分の宝石箱を見せ合うように、詩や美しい言葉を交換し合う時間を持つこともあった。私が大阪外国語大学のヒンディー語専攻に入学したのも、父の大切にしている言葉をより深く知りたいと思ったからだった。

ところで父は、いったいいくつの詩を暗唱していたのだろう。ヒンディー語はもちろん、サンスクリット語、母語であるアワディー、英語…様々な言語の海から、真珠のように素晴らしい詩やシュロークを取り出してきた。「私は全部持っている」うれしそうに私を見て笑う顔を今でも思い出す。父にとって、友達も先生も、食事もー普段のものからご馳走までー薬箱も、すべて言葉の中にあった。カーリダーサ、アクバル、バガヴァッドギーター…何度これらの名前が父の口から出たことだろうか。聞かせてくれるものは、単に表現が美しいだとか喩えが上手いだとかというものではなく、この世と人生、命を肯定する眼差しにあふれていた。父が聞かせてくれた言葉の数々は心のご飯となって私を養ってくれた。

言葉の人であった父は、同時に‘時間’の人でもあった。

この文章を読まれている方の中には、父が大阪外国語大学に勤務していた当時の関係者の方が少なからずおられると思う。大阪外大に勤務していた２０年余り、おそらく父は一度も遅刻をしていない。時間厳守。インド人にはとても珍しく、完璧なまでに時間を守る人であった。これも、外の顔だけではない。家庭内においてもその徹底ぶりはすさまじいものだった。大きな音で鳴るチャイム付きの時計が今でも亀岡の家にあるが、父の日常はすべてこのチャイムに従っていた。学校のチャイムよろしく、朝から晩まで、すべての予定はこのチャイムに管理されていた。

しかし、娘から見て父のこの習性は、単に時間に潔癖というのとは少し違うように感じる。無神教の父が唯一信頼していたのは、大いなる時間の流れ Mahā Kāl だったように思う。そして、時間＝人生の時間ととらえて、１秒たりとも無駄にしないようにしていた。時間に対する敬意は、そのまま人生に対する敬意でもあった。夜は８時からお酒を飲む習慣のあった父だが、それまでの日中の時間は見事なまでに有意義に使いきっていた。人に頭を下げたことのない人物が、偉大なる時間の神には完全にひれ伏した。見返りに、一点（１秒）の悔いもない人生を父は手に入れることができたと思っている。

このように、父は、時間というキャンバスに言葉で人生を描いた人だった。

５０年間日本に住んだが、彼の内側に、ニホンは少しも入らなかった。内なる井戸に釣瓶をおろして、最後までインド文化から潤いを得ていた。それだけ、彼の中にあるインドは豊かだったのだ。

「私は全部持っている」本当にその通り。インド文化の豊かさを言葉の形で自分のうちに持つ人だった。

父が教えてくれたいくつかの詩やシュロークを私も暗唱している。それは、単なる暗記した言葉ではない。ものの見方や哲学、智慧、すべてが凝縮されたものだ。この世と命への肯定。生きる上で最大の力を私は言葉を通して父からもらった。

父は今も生きている。私の中にある言葉、そして私が身を置くこの時間の中に生きている。